

玉虫厨子絵に見られる自他の救済（「菩薩道」）についての一考察

ウォーリー朗子（ハーバード大学）

玉虫厨子絵の主題と所依經典の問題については、石田尚豊氏のそれをはじめ多くの研究が行なわれてきた。本発表ではそれらを踏まえつつ、同厨子絵の意味を大乘仏教における「菩薩道」の二つの根本理念、すなはち「自己の救済」と「他者の救済の手助け」の特に後者に注目して新たな解釈を提示したい。

本発表で留意するのは、各場面の要所に描かれた「小宝華」（蓮華の蕾のような文様）の存在である。この小宝華については、林良一氏が須弥座正面の供養図中の合子との関連で言及して以来、吉村怜氏・石田尚豊氏などによってその意義が検討されてきたが、いずれも小宝華の点ぜられた部分が何か特別の意義をもつものという以上の解釈はなされてこなかった。そこで、まず主題の明らかな須弥座左右の本生図における小宝華から見てみると、左右とも異時同図法で描かれた以下の場面のうち、それぞれ一場面だけ小宝華が描かれていないことが分かる。すなはち、右側面の捨身飼虎図では、薩埵太子が自らの衣を木にかけ、彼が崖から飛び降りる場面には小宝華が点ぜられているが、彼が虎の母子に食べられている場面には点ぜられていない。一方、左側面の施身聞偈図でも、雪山童子が偈を岩肌書き付けている場面と彼が羅刹に自らの身を捧げるため崖から飛び降り、羅刹が帝釈天の姿に戻って童子を助ける場面にはそれぞれ小宝華が描かれているのに対し、童子が羅刹から偈を聞く場面には小宝華が見られない。ここでは自己と他者の救済場面が明確に区別され、両図とも「他者の救済」を表す場面のみ小宝華が描かれていることに気づかれる。このことに着目すると、須弥座の正・背面と宮殿部背面に描かれた小宝華も、「他者の救済」を表す場面の一表象として描かれた可能性が濃い。

このような小宝華の意義を前提として改めて厨子絵の構成を見てみると、そこでは大乘仏教の「菩薩道」の根底にある「救済される存在としての他者」の理念が強調され、より分かりやすく説かれていることがうかがえる。厨子絵については、前後の図様と左右の図様の二組が対となる構成であることは良く知られている。この対関係に注目すると、須弥座正面の供養図と同背面の須弥山図は、そこで表現された奇跡的な出来事がいずれも仏事によってもたらされる悟り、したがって「他者」を通してもたらされる自己の救済に結びつく点で共通していることが判明する。一方、さきの両側面に描かれた本生図は、正・背面のように受動的ではなく、「他者を救う」というより積極的な姿勢を示している。そして、他者を救済する際の指針となる「四安楽行」が、宮殿部背面の靈鷲山図中の四僧によって表現されているのである。

この四安楽行の思想は聖徳太子撰と伝えられる『法華義疏』にも認められる。そこには「四安楽行者。一身善行。二口善行。三意善行。四慈悲善行。（中略）今此四行。前三行即是自行。後一慈悲行則是外化行。菩薩之道」と記され、身安楽行から意安楽行までの三つが「自行」であるのに対し、第四の慈悲善行（つまり誓願安楽行）のみが「外化行」、したがって「菩薩道」であると解される。『法華経』では同等に扱われていた四安楽行が、『法華義疏』では「自行」と「外化行」に区別され、自らを行することの意義が「他者」を行することにあると説かれているのである。つまり、玉虫厨子絵が適切なモチーフの選択と巧みな構成（小宝華の点じ方を含む）によって伝えようとしたのは、まさに「菩薩道」におけるこの「他者」の概念ではないか。玉虫厨子絵を通し、観者は自らが釈迦の慈悲によって救われる「他者」であると同時に、仏法を学び伝えることで「仏事」をおこない、他者を救済する存在でもあることを理解し得たと思われるのである。